

急性外部被ばくと急性障害

一瞬に大量の放射線を被ばくすると急性症状が出ます。短時間に500mSvの外部被ばくを受けると、白血球の減少などの影響(確定的影響)が生じてきます。1Svになると嘔気・嘔吐などの急性症状が出ると言われています。2Sv以上になってくると脱毛や出血が出てきて、死亡者も徐々に出現してきます(図5参照)。

福島原発内で作業されている労働者の方々の中には、数分間あるいは数十分間で1Svを超えるという苛酷な状況で作業を余儀なくされている場合もあります。こうした環境の労働者の場合には、急性被ばくの危険性が十分にあり、直接生命を左右する問題が生じてくることもあるので注意が必要です。

最近の報道によると、苛酷な作業を強いられている現場労働者の放射線被ばく管理のずさんな実態が明らかとなっています。放射線管理者不在で作業させたり、線量計を携帯させていなかったり、また放射線業務外の女性作業員の被ばくも問題です。250mSvを超える労働者の存在も報道されました。

作業は多くを下請け業者が担当していますが、「運転手募集」の案内だったが、実際に行ってみると福島原発だった等、職業安定法違反の虚偽募集も報道されました。

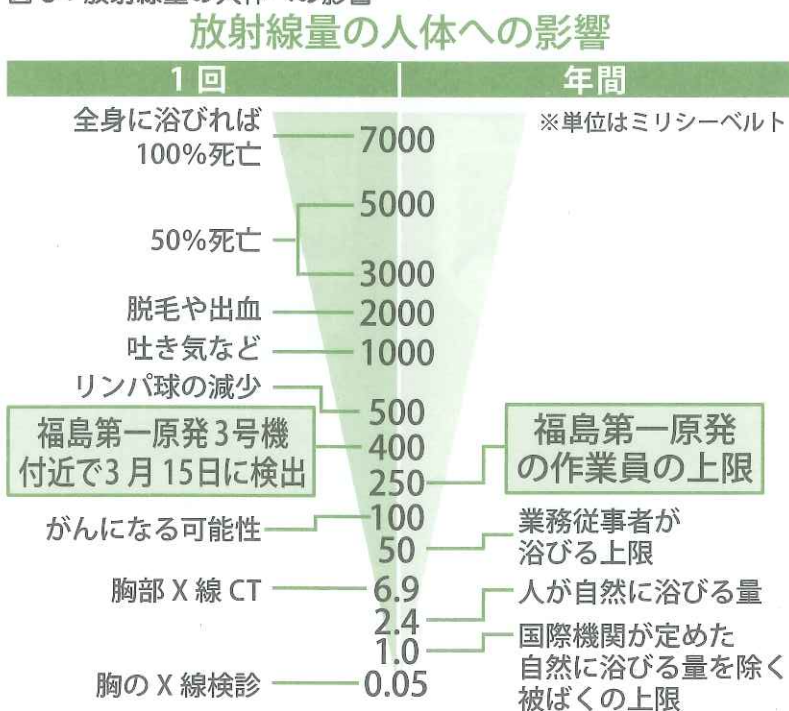
国と東京電力の責任と指導が問われます。この間厚生労働大臣の決裁で、労働者の被ばく線量限度を100mSvから250mSvに引き上げました。また年間放射線限度

50mSvを撤廃するなど、なし崩し的な対応をしてきました。

現場の労働者の日々の被ばく線量がどうなのかをきちんと測定し記録していくことは、最低限必要です。さらに内部被ばく量をも測定できるホールボディカウンターを必要な数だけきちんと設置し、現場の労働者の安全確保の対策にも努めることが大切です。極めて貧弱な医療体制の充実は急務です。きちんとした産業医チームの配置による3管理(①作業環境管理 ②作業管理 ③健康管理)の改善が必要です。

原発事故の収束を図るため、国と東京電力に対し十分な防護対策と適切な作業環境づくりの指導を強く求めます。

図5：放射線量の人体への影響



東京新聞を参考に作成